

崔浩「天人思想」考

孫 陔 峰

1 序

北魏は天人思想が濃厚におこなわれた時代であった。その天人思想とは、漢代の天人思想、とくに董仲舒の「天人感応」によって原型が示されたものに近いものであった。すなわち天象に示される災異や祥瑞が、人間社会の出来事と対応関係にあるという思想である。それによれば、人間は天象を観測することを通じて未来を予測することができる。したがってそれによって国家の政治の方向も決定することができる。ゆえに、天人思想に精通することは、政治運営上、非常に重大な要素と考えられていた。

鮮卑族の北魏政権がこの天人思想を受容する契機は、道武帝が幼年時代に長安で十年間の放浪生活を送り、漢文化を学び、天文（天人思想）を学んだことにあった。『宋書』「索虜伝」に「開（道武帝）、頗る学問有り、天文を曉る」とあり、また『北魏』「太祖紀」にも、「天人の合会、帝王の業は、夫

れ豈に虚しく応ぜんや……天命の易らざるを審らかにし、微応の潜授を察す」とある。さらに太史が天文錯乱について上奏した際、道武帝は「故に数しば官号を革め、一は凶狡を防塞せんと欲し、二は災を消し變に應せんと欲」したという。このように、天人思想は開国初期以来、北魏における政治的判断のひとつの重要な基盤となっていた。そして道武帝の天人思想は、後帝たちにも引き継がれたのであった。

崔浩（三八一—四五〇）は、北魏初期の漢族大臣であった。彼は天人思想をかりて自分の政治的主張を行い、またすぐれた軍事的才能によって政権内において枢要な地位を占めていた。史書による彼の事績の評価は、「天人の際」によく通じていたからだということになっている。『魏書』「崔浩伝」に「浩、天人の際を綜覈し、其の綱紀を挙げ、諸の処決する所、多く験の応ずること有り。恒に軍国の大謀において、甚だ寵密を為す」とある。また『新唐書』にも同様に崔浩の天人思想の評価が載せられている。さらに『旧五代史』『新五代史』

では天人思想にすぐれた崔浩が神靈として祀られたという記録がある。『新唐書』『旧五代史』『新五代史』中の崔浩と関わる文献は実は『魏書』から引用されたものである。したがってつきつめると、崔浩の天人思想の存在を認定したのは『魏書』だけであったが、しかしこれら歴史書の編修過程において、崔浩の政治的実績を評価する根底に天人思想があることについては疑われることはなかった。

本論はそのような歴史的評価に対して、あらためて『魏書』『崔浩伝』を中心に、彼の天人思想を分析し、その実際がどのようなものであったのかを考察するものである。^①

2 崔浩の天人思想の展開

まず、『魏書』『崔浩伝』に記された天象の事例によって崔浩の国政の議論における天人思想を見てみる。

(紀元四一八年、太宗泰常) 三年、彗星天津を出でて、太微に入り、北斗を経て、紫微に絡み、天棓を犯す。八十餘日にして、漢に至りて滅す。(中略) 浩曰く、古人に言有り。夫れ災異の生ずるは、人に由りて起る。人^を變つこと無ければ、妖自ら作らず。故に人、下に失すれば、則ち變は上に見わる。天事の恒象は、百代易らず。漢書

に載す、王莽、位を篡うの前、彗星の出入するは、正に今と同じきなり。國家、主尊くして臣卑く、上下に序有れば、民に異望無し。唯だ僭^{けん}晉卑削すれば、主弱く臣強く、累世^{るいせい}陵^{りやう}運^{うん}す。故に桓^{かん}玄^{げん}逼^{ひつ}奪^{だつ}し、劉裕^{りゆう}權^{けん}を乗る。彗^{すい}孛^{はつ}は、惡氣の生ずる所なり。是れ僭^{けん}晉將^{しやう}に滅^{めつ}びんとし、劉裕^{りゆう}之^これを篡^{せん}うの應^{おう}と為^なすなり。

この崔浩の天象の議論には四つのポイントがある。第一に、災異の発生が人間の作為に対応していると考えていること。第二に、天象の発生と人間の災異とに周期性を見出していること。第三に、王莽の奪^{だつ}權^{けん}前の天象が今の天象とよく似ているということ。第四に、劉裕が奪^{だつ}權^{けん}しようとしていた情勢において、その天象は劉裕が政權を奪^{だつ}う兆^{しやう}しと考えられたことである。崔浩は以上の四点の天象から劉裕が必ず政權を奪^{だつ}うに違いないという結論を導いている。そしてそののち、劉裕が政權を奪^{だつ}つたことが、崔浩の天象にもとづく予言の正確さを証明することになる。

ところで、以上に見たかぎりによると崔浩は当時の天象予見の技術をもちいて天象と政治とをめぐりに結び付けていたかのように見える。ところが『魏書』『劉裕列伝』の泰常元年の記載によれば「(司馬) 德宗は(劉) 裕を十郡に封じて宋公と為す。相国、九錫を加えて、僭^{けん}りて魏晉の故事に擬ら

う」とある。この劉裕の動向は、西晋の司馬炎が魏を篡奪する過程によく似ている。したがって劉裕が政権を奪おうとしていることは明白である。一方、この天象が実際に発生したのは太宗の泰常三年であり、劉裕が実際に政権を奪うのは泰常五年である。つまり崔浩の政治的予見は、天象がなくとも泰常元年以来の情勢を適確に判断していれば可能だったことである。

崔浩は政治的議論を行う際、経史の文献を引用して論拠とすることを好んだ。つぎに「崔浩伝」に見える彼の引用文を挙げてみる。

- ① 太宗神瑞二年(四一五)、春秋左氏傳説、神降于莘、其至之日、各以其物祭也。(出典『春秋左氏伝』「莊公三十二年」)
- ② 太宗泰常元年(四一六)、謂下莊刺虎、兩得之勢也。(出典『論語』「憲問」、『史記』「張儀列伝」、『三國志』「魏書、張既列伝」)
- ③ 太宗泰常二年(四一七)、孔子曰、善人為邦百年、可以勝殘去殺。(出典『論語』「子路」)
- ④ 太宗泰常三年(四一八)、漢書載、王莽篡位之前、彗星出入、正與今同。(出典なし)
- ⑤ 太宗泰常六年(四二二)、昔宋景見災修德、熒惑退

舍。(出典『呂氏春秋』「季夏紀第六、制樂」、『淮南子』「道應訓」、『史記』「宋微子世家」)

⑥ 太宗泰常七年(四二二)、春秋、晉士丐帥師侵齊、聞齊侯卒、乃還。君子大其不伐喪、以為恩足以感孝子、義足以動諸侯。(出典『春秋左氏伝』「襄公十九年」、『春秋公羊伝』「襄公十九年」、『春秋穀梁傳』「襄公十九年」)

⑦ 世祖始光二年(四三三)、陽者、德也、陰者、刑也。故日蝕修德、月蝕修刑。(出典『漢書』「董仲舒伝」)

⑧ 世祖始光二年(四三三)、古人語曰、非常之原、黎民懼焉、及其成功、天下晏然。(『史記』「司馬相如列伝」)

⑨ 世祖太平真君八年(四四七)、漢書地理志稱、涼州之畜、為天下饒。(出典『漢書』「地理志第八」)

「崔浩伝」中の九条のうち、五条は「崔浩伝」に出典が示されている。残りの四条のうち、三条は出典を調査・確認できる。ただ第四条については出典が「漢書」とされているのに、「漢書」には出典は見当たらない。この第四条は、崔浩が、この天象は劉裕が政権を奪おうとする兆しであることを証明するために、王莽の奪権を例として挙げたものである。しかし「漢書」にこの記事も天象もないということになると、

崔浩の発言は、かなり不確かなものということになる。すなわち、これは崔浩が真に天人思想に精通していたかを疑わせるものである。

3 天象を議論する方法

天人思想によつて、政治的議論を行うためには、天文に詳しくなければならぬはずである。『魏書』「高允伝」に、崔浩と高允との天象をめぐる議論が載っている。

時に、浩、諸術士を集め、漢元以來、日月の薄蝕、五星の行度を考校す。并せて前史の失を識り、別に魏曆を為りて、以て允に示す。允曰く、天文曆數は空論すべからず。夫れ善く遠きを言う者は必ず先ず近きに驗す。且つ漢元年の冬十月、五星、東井に聚まるは、此れ乃ち曆術の淺きなり。今、漢史を識るも、此の謬りを覺らざれば、後人の今を識ること猶お今の古を識るがごときを恐る、と。浩曰く、謬つ所とは何をか云う、と。允曰く、星傳を案ずるに、金水の二星は常に日に附きて行く。冬十月、日は尾箕びびに在り、昏に申南に没し、而して東井は方に寅北に出でんとす。二星は何に因りてか日に背きて行かん。是れ史官、其の事を神にせんと欲し、復たこれを理にお

いて推さず。浩曰く、變と為さんと欲する者は何の可とせざる所あらんや。君獨だ三星の聚まるを疑わずして、二星の來るを怪しむ、と。允曰く、此れ空言を以て争う可からず、宜しく更に之れを審らかにすべし。(中略)後、歲餘、浩、允に謂いて曰く、先に論ずる所の者は、本より心を注がず。更に考究するに及び、果して君の語の如し。前の三月を以て東井に聚まるなり。十月に非ざるなり。

崔浩が曆書を改めようとしたとき、高允がそれに反対した。理由は天文曆術は空論ではないからであるという。さらに高允は『星傳』を引用しつつ、「漢元年の冬十月、五星、東井に聚まる」は、「此れ乃ち曆術の淺きなり」であつて、この年、劉邦が秦に攻め入る天意を示すために「史官、其の事を神にせんと欲し、復たこれを理において推さ」なかつたからであると論証する。しかし崔浩は「變と為さんと欲する者は何の可とせざる所あらんや」としていた。つまり自分の星辰解釈のどこが悪いのか、あなたの方こそ、たいして重要ではない星象を重視しているだけだ、と反論している。だがそのうち、崔浩は自分の天象に対する計算が間違っていたことに気づいた。つまり、崔浩の天象に対する知見は、じつは決して高くはなかつたのである。清代の王念孫は『讀書雜誌』に

おいて高允に賛同し、「三月五星東井に聚まる」の崔浩説は誤りであるとしている。⁹⁾

また次のような崔浩と張淵との議論がある。

浩曰く、「(張)淵、天の時を言うは、是れ其の職とする所なり。形勢を論ずるが若きは、彼の知る所に非ず。斯れ乃ち漢世の舊説常談にして、之れを今に施せば、事宜と合わざるなり」と。¹⁰⁾

張淵は北魏の天文を掌る太史令である。崔浩は、張淵は天象の運行は分かっているのだから、国内外の政治情勢には詳しくはないと軽侮している。崔浩は情勢が分からず、ただ天象を観測するだけで意見を述べるのは無意味だとするのである。ここに彼の天象に対するスタンスが現れている。さらにいえば、彼は天人によって政治的議論を行う際、天象にもとづくのではなく、むしろ実際の政治的情勢にもとづいて天象を解くのである。

初め、姚興死するの前歳、太史奏す、①熒惑、瓠瓜星^{こか}の中に在り、一夜忽然として亡失し、在る所を知らず、と。(中略)浩對えて曰く、②「案ずるに春秋左氏傳の説に、神、莘に降り、其の至るの日、各おの其の物を以て祭る

なり。③請いて日辰を以てこれを推せば、庚午の夕、辛未の朝、天に陰雲有り。熒惑の亡は、當に此の二日の内に在るべし。④庚と未と、皆秦を主り、辛を西夷と為す。今、姚興の咸陽に據るは、是れ熒惑秦に入るなり、と。

(中略)⑤後八十餘日にして、熒惑果して東井を出でて、留守盤旋し、秦中は大旱し、赤地たりて、昆明の水竭く。¹¹⁾⑥明年、姚興死し、二子兵を交え、三年にして、國滅ぶ。

①は太史令が上奏した天象である。つまり熒惑が瓠瓜星の中に急に消えてしまったことである。②は崔浩が祭祀によって災いを避くべきことを述べるものである。「春秋左氏伝」「莊公三十二年」に「秋十月、神、莘(国名)に降ること有り。惠王これを内史過(周大夫)に問いて曰く、是れ何の故ならんや、と」とある。この例から考えるに、①と②にはとくにつながりはない。③は熒惑が消えた時間である。この文の「日辰を以てこれを推す」の「日辰」には三つの意味がある。第一、日月星辰、第二、天干と地支、第三、時間。この場合は下文によって天干と地支の意味であると考えてよい。④の熒惑が秦に入るとは、即ち姚興が秦に拠ることをいう。通常の天地分野説では、天の東井と地の秦とは同じ分野に属する。しかし、崔浩のいうような天干と地支による天地の分野を対応させる説は見当たらない。庚と辛は天干であり、未は

地支であるが、日辰では天象の運行の時間しか計算できないのである。このとき熒惑はすでに秦に入っていたのであるが、崔浩の計算によると実際には⑤は④と矛盾することになる。なぜなら、そののちの八十余日後、熒惑が東井から現れていることについて、第一に、崔浩は熒惑が既に秦に入つたと説明するものの、しかしどの日に東井から現れたのかを述べていないのであり、もし崔浩がこの天象を観測していたとすれば、熒惑の運行を見通せたはずだからである。第二に、⑤と⑥とは天象の発生の結果であり、崔浩が予見していたものではない。第三に、崔浩は姚興の勢力が衰退したことを知っているながら、いつ滅亡するかまでは言っていない。『魏書』「崔浩伝」には、「昔、姚興虚名を養うを好むも、実用無し。子の泓は又た病し、衆、叛し、親、離る」とある。崔浩の議論を見てみると、崔浩はむしろ姚興という人物をよく調べており、姚興に関連する多くの情報を獲得していたことによつて、正確な判断を下したというべきである。崔浩の政論と天象の発生とは事実上つながりはないのである。

4 「天人」と「占卜」

『魏書』「崔浩伝」には崔浩がみずから「天人」ということを述べた例が一箇所だけある。

崔浩曰く、始光中、……往年以来、熒惑再び羽林を守り、皆鈎己こうぎを成す。其の占や、秦亡ぶなり。又今年、五星並びに東方に出づ。天応じ人和し、时会並び集まり、失すべからざるなり、と。

これによれば、崔浩の述べる「五星並びに東方に出づ」る天象の発生は太武帝の始光年間（四二四—四二八）である。しかし現代の天文計算によると、太武帝始光年間に五星の聚会はない。五星聚会とは、（一）、五大惑星は黄道の黄経の六十度の範囲内に在ること、（二）、五大惑星は太陽側に在ること、（三）、各惑星は太陽より距離と角度とを肉眼で見えること。すなわち木星、金星は太陽を去ること十一度以上、土星、水星、火星は太陽を去ること十五度以上である。次の表は北魏初期に発生した二回の五星聚会である。①②

五星聚会		五星聚会	
第一回	第二回	第一回	第二回
開始時間	終了時間	開始時間	終了時間
太清曆元年	太武帝延和元年	太清曆元年	太武帝延和元年
392	433	393	433
12	3	12	3
12	30	12	30
乙亥	己亥	丙申	癸巳
246.63	352.28	259.60	352.28
247.58	337.44	246.76	337.44
206.64	359.51	220.15	345.97
206.19	345.98	209.28	347.60
193.30	320.16	200.55	319.62
281.74	15.92	283.13	10.10

このことから崔浩は、実は天象を觀測していなかったのではないかと推測できる。彼は政治上の見解を表すために「五星、東方に出づ」ることに借りて、西伐に利することをアピールしようとしているだけなのである。『漢書』「趙充国伝」に「五星東方に出づ。中国、大いに利す」という事例があるが、崔浩はこの事例すらも引用していない。

太武帝の始光中（四二四—四二八）、朝廷内において夏國の赫連昌討伐の議論がおこった。大臣らはみな反対したが、崔浩は、太武帝の赫連昌の討伐の願いを知っていた。『魏書』「鉄弗劉虎列伝」に次のようにある。

（赫連）昌、字は還国、一名は折、屈子（赫連勃勃）の第三子なり。既に位を僭りて、年を承光（四二五）に改む。世祖、屈子死し、諸子相い攻め、関中大いに乱るを聞き、是に於いて西伐す。

これによると、太武帝は事前に赫連昌に関して相当の情報収集をしていたことが知られる。しかし、大臣等の反対のために西伐の困難を感じていた。そのとき、崔浩が天象の変化を借りて赫連昌を攻めたなら必ず勝てると説明したのである。太武帝と崔浩とは赫連勃勃がすでに死んでいたこと、赫連昌が即位したばかりであること、兄弟が互いに攻めあっている

ことを知っていた。このような機会は得がたい。崔浩はそれに乗じて太武帝の西伐策を推進しようとしたのであった。またつぎの例を見てみる。

太宗初……是の時、後宮に兔有り、門官に駭問するも、従りて入るを得ることなし。太宗之を怪しみ、浩に命じて其の咎徴を推さしむ。浩、以て当に隣国より嬪嬙を貢ぐ者有るべし、善応なりと為す。明年、姚興、果して女を献ず。神瑞二年……。

兔があらわれたことについて、崔浩が「咎徴を推」した時期は神瑞二年以前である。太宗明元帝の在位年号は、永興（五年間）、神瑞（三年間）、泰常（八年間）である。ところで姚興の献女が決定した時期は永興五年である。

永興三年、（姚）興、周寶をして朝貢せしむ。五年、興、使をして朝貢し、並せて女を進むることを請わしむ。太宗之を許す。

永興五年十一月癸酉、姚興使をして朝貢せしめ、来りて女を進むることを請わしむ。帝之を許す。

すなわち朝廷においてはすでに永興五年に姚興の献女の情報
は知られていたのである。それゆえ崔浩の「咎徵」が的中し
たとしても、占いに基づくのではなく、事前に情報を獲得し
ていたからだとみられるのである。

5 軍事家としての崔浩

崔浩は軍事的才能に秀でていたことで有名であった。彼は
太武帝の征伐にしたがって謀略を献じ、重要な戦争の勝利を
得るために力を注いだ。つぎの文は崔浩が三国時代の諸葛亮
を評論したものである。

夫れ亮の劉備を相くるや、英雄奮発するの時、君臣相
得て、魚水を喻と為すも、曹氏と天下を争うあたわず。
荊州を委棄し、巴蜀に退入し、窮しき崎嶇の地を守り、
邊夷の間に僭號す。此れ策の下なるものにして、趙佗を
以て偶と為すべく、而して管蕭の亞匹を以て、亦た過ぎ
ざるか。且つ亮は既に蜀に據り、勢力を量らず、嚴威切
法、蜀人を控勒し、邊夷の衆を以て上國を抗衡せんと欲
す。兵を隴右に出し、再び祁山を攻め、一たび陳倉を攻
め、疏遲して會を失い、摧衄して反る。後に秦川に入り、
更に野戦を求む。魏人其の意を知り、以て戦わずしてこ

れを屈す。窮して勢盡くを知り、憤結して中を攻め、病
を發して死す、これに由りてこれを言えは、豈に古の善
將の、見て難を知るべきに合せんや。

崔浩は諸葛亮を五つの点から批評している。第一に、諸葛亮
は劉備を補佐して曹操と対抗することができなかったこと。
第二に、蜀に入つて劉備に帝を僭称させたのは下策であるこ
と。第三に、諸葛亮が自ら管仲に擬えるのは言いすぎである
こと。第四に、勢力は曹操に及んでいないのに、さらに野戦
を求めようとしたこと。第五に、結局志が叶わず死亡したこと。
ここで崔浩が述べていることはすべて歴史的事実であ
り、正しいことをいっている。そしてその限りにおいては崔
浩の諸葛亮に対する評価は冷徹であり、合理的である。崔浩
のもつ資質を示している。

つぎは崔浩が世祖に従つて征伐するときに発生した出来事
である。

會、風雨の東南より來ること有り、沙塵ありて昏冥す。
宦者趙倪進みて曰く、今、風雨、賊の後より來れば、我
は向かい、彼は背にす。天、人を助けず、將士は飢渴す。
願わくは陛下、これを避け、更めて後日を待たんこと
を、と。崔浩曰く、是れ何の言いか。千日勝を制し、一

日の中に豈に變易を得んや。賊、前は行みて止まらず、後は已に離絶す。宜しく軍を分けて隱出し、不意を掩撃すべし。風道は人に在り、豈に常有らんや、と。^②

赫連昌と対戦しているとき、突然大風が敵の方から吹いてきた。宦官趙倪は追撃中止を主張したが、崔浩は「風道は人に在り、豈に常有らんや」と述べてさらに追撃をかけようとした。これは崔浩が軍事面におけるチャンス把握の能力がすぐれていたことをあらわしている。『朱子語類』には崔浩が張良、諸葛亮とともに高く評価されている。

子房・孔明の人品を問う。曰く、子房は全く是れ黄老なり、皆黄石の一編の中より來る。(中略)孔明の學術は亦た甚だ雜なり、と。(中略)又問う、崔浩は如何、と。曰く、也た是れ博洽底人なり、と。^③

周知のように張良と諸葛亮とはともに軍事家として著名であるが、ここに崔浩の名前も並列されているのである。いわば、崔浩の軍事的才能は歴史的に認められていたといえよう。そして彼のその軍事的才能は、じつは情報収集ということに深く結びついていた。

朝廷の礼儀、優文策詔、軍国の書記、尽く浩と関わる。^④

この例によつて、崔浩は朝廷の諸方面の情報に接触することができたことがわかる。皇帝に上奏されるまえに、彼はすでに情報を握っていたのである。彼はこうした情報にもとづきつつ、軍事にも政治にも、すぐれた結果を残していたのであった。『魏書』『崔浩伝』に崔浩への史官の評価としてつぎのような文がある。

崔浩は才芸通博し、天人を究覽し、政事の籌策は、時に之に二する莫し。此れ其れ自らを子房に比うる所以なり。^⑤

史官は三点指摘している。第一に、「天人」である。第二に、政治的見解の高明である。第三に、軍事の才能である。上述のように崔浩は実際には天人に精通してはいなかった。一方、崔浩はたしかにすぐれた政治的才能・軍事的才能をもっていた。そして彼のその政治的才能は、実は情報の収集ということに支えられて發揮されたものでもあったのである。

6 結論

上述の考察を通じて、「崔浩伝」の「天人の際」はほとんど

ど虚構であったことがわかった。崔浩は自分の政治的見解を補強するために、天象を借りたにすぎなかった。しかし、歴史を編修する史官はこの真偽を検証しないままに記載をおこなった。そしてその記述が『北史』『新唐書』『旧五代史』『新五代史』にまで影響を与え、その評価が続いてきたのであった。もともと『魏書』に崔浩の「天人思想」が記録されたのは、一つには太宗の明元帝が崔浩を賞賛した事実があったからであろうと考えてよいのであるが、また北魏初期の皇帝はみな天人思想を篤く信じていたという背景も見逃せない。崔浩はそうした背景の中で天人思想に依拠する政論を行い、それが成功をおさめたため、史書にそのように記録されたと考えるべきである。彼が政治的にも成功を収め、軍事的にも成功を収めたのは、実際は天人思想そのものによったのではなく、情報を適確に把握し、それを適切に遂行できたからであった。

注

- (1) 「国家将有失道之败，天乃先出灾异以譴告之。不知自省，又出怪异以警懼之。尚不知变，而伤败乃至。」〔漢書〕「董仲舒伝」
- (2) 李凭「第一章 皇權初建」〔北魏平城時代〕一六頁、社会科学文献出版社、二〇〇〇。
- (3) 崔浩、字は伯淵、清河の東武城（今、山東武城西）の人。魏の司空林、七世の孫。曾祖悦は、石季龍に仕え、祖潜は、慕容暉に仕えた。父は宏、字は玄伯、白馬公を賜る。崔浩は弱冠にして直郎

となり、のち司徒となった。かつて寇謙之と聯合して仏教を滅ぼそうとした。『孝經』論語『詩』尚書『春秋』礼記『周易』食経に注し、また『五寅元曆』を著した。『隋書』経籍志に『周易』十卷、『易就章』一卷、『曆数』一卷、『賦集』八十卷が記されている。『北史』崔宏伝に崔浩の『晋後書』五十余巻が載る。また『全上古三代秦漢三國六朝文』『全後魏文』第二十二巻に文十篇が採録されている。

- (4) 『後魏神瑞二年十一月、熒惑在狐瓜星中、一夕忽亡、不知所。崔浩以日辰推之、曰、庚午之夕、辛未之朝、天有陰雲、熒惑之亡、在此二日。庚午未皆主秦、辛未西夷。今姚興據咸陽、是熒惑入秦矣。其後熒惑果出東井、留守盤旋、秦中大旱赤地、昆明水竭。明年、姚興死、二子交兵、三年、國滅。』〔新唐書〕「志第十七下、歴三下」。
- (5) 「有替者張濬自言知術数、事太白山神。其神祠即元魏時崔浩廟也。」〔旧五代史〕「末帝紀上」。「有替者張濬、自言事太白山神。神、魏崔浩也、其言吉凶無不中。」〔新五代史〕「劉延朗伝」。
- (6) 崔浩に関する先行論文はほとんどすべてが崔浩殺害の政治的事件をめぐる研究であり、崔浩の天人思想についての研究はあまりない。崔浩の誅殺事件をめぐる論文には以下のようなものがある。牟潤孫「崔浩與其政敵」〔輔仁學誌〕十卷、一、二期、一九四一。陳寅恪「崔浩與寇謙之」〔嶺南學報〕十一卷、第一期、一九五〇。王伊同「崔浩國書獄釋疑」〔清華學報〕新一卷二期、一九五七。石田德行「胡族政權下における漢人貴族―再び崔浩被誅事件を中心として」〔山崎宏先生退官記念東洋史論集〕大安書店、一九六七。周一良「関于崔浩國史之獄」〔中華文史論叢〕四期、一九八〇。陳漢平・陳漢玉「崔浩之誅與民族矛盾何干」〔民族研究〕一九八二、第五期。莫久恩「北魏前期政治中的民族問題和崔浩之誅」〔魏晉南北朝史研究〕四川省社会科学出版社、一九八六。川本芳昭「景穆太子と崔浩―北魏太武帝による廢佛前

後の政局をめぐって」(『東方学』第九十一輯、東方学会、一九九八)。

(7) 「三年、彗星出天津、入太微、經北斗、絡紫微、犯天棓。八十餘日、至漢而滅。(中略) 浩曰、古人有言、夫災異之生、由人而起。人無讒焉、妖不自作。故人失於下、則變見於上。天事恒象、百代不易。漢書載、王莽篡位之前、彗星出、正與今同。國家主尊臣卑、上下有序、民無異望。唯僭晉卑削、主弱臣強、累世陵覆。故桓玄逼奪、劉裕秉權。彗孛者、惡氣之所生。是為僭晉將滅、劉裕篡之之應也。」(『魏書』崔浩傳)

(8) 「時浩集諸術士、考校漢元以來、日月薄蝕、五星行度、并議前史之失。別為魏曆、以示允。允曰、天文曆數不可空論。夫善言遠者必先驗於近。且漢元年冬十月、五星聚於東井、此乃曆術之淺。今讖漢史、而不覺此謬、恐後人譏今猶今之譏古。浩曰、所謬云何。允曰、案星傳、金水二星常附日而行。冬十月、日在尾箕、昏沒於申南、而東井方出於寅北。二星何因背日而行。是史官欲神其事、不復推之於理。浩曰、欲為變者何所不可。君獨不疑三星之聚、而怪二星之來。允曰、此不可以空言爭、宜更審之。(中略) 後歲餘、浩謂允曰、先所論者、本不注心。及更考究、果如君語。以前三月聚於東井、非十月也。」(『魏書』高允傳)

(9) 「漢元年十月五星聚於東井、以歷推之、從歲星也。劉敞曰、按歷太白辰星去日率不能一兩次、今十月而從歲星於東井非理也。然則五星以秦之十月聚東井耳。秦之十月今之七月、日在在鶴尾、故則五星辰星得從歲星也。引之曰、此用崔浩前三月聚於東井之說(見魏書高允傳) 其美非也。下文客謂張耳東井秦地、漢王入秦五星從歲星聚、當以義取天下、是五星聚東井在入秦之月。高紀曰、秦三年九月、趙高立二世子嬰為秦王、下遂元元年冬十月五星聚於東井、沛公至霸上、秦王子嬰封皇帝璽符節降棧道旁、是入秦在十月、上與九月相接、非建亥之月而何、若七月、則沛公猶未入秦、不足為受命之符矣。史記趙蒼傳、張蒼為計相時緒正律歷以高祖十月始至霸

上、因故秦時以十月為歲首弗革、若以十為今七月、則非秦之歲首矣。挾秦楚之際月表、歲首建十月而終於九月、其第四月避諱改正月為端月、漢高惠文景紀及元封六年以前、正月皆在第四月、無以十月為正月者、亦無以七月為十月者、蓋秦用顛倒曆、自正月建寅至十二月建丑、未嘗易其次也。豈得謂秦之十月今七月乎(辨見高紀春正月下)。十月五星聚東井乃事之必無者、高允以為史官欲神其事、不復推之於理(見高允傳) 是也。必欲強為之說、以遷就之則謬矣。(王念孫『說書雜誌』漢書志第五卷、十月五星聚於東井)。

(10) 「浩曰、淵言天時、是其所職。若論形勢、非彼所知。斯乃漢世舊說常談。施之於今、不合事宜也。」(『魏書』崔浩傳)

(11) 「魏書」崔浩傳を参照。またこの文は注(4)の『新唐書』志第十七曆三下と同じ。

(12) 第一に、日月星辰。「史記」曆書に「至今上即位、(中略) 然後日辰之度与夏正同」とある。第二に、天干と地支。「論衡」「詰問」に「日十而辰十二、日辰相配、故甲与子連」とある。第三に、時間。「旧五代史」晋書、少帝紀第三に「即便北伐、不須先定日辰」とある。

(13) 「漢書」「地理志」、張双楙『淮南子校釈』「天文訓」(三八五頁、北京大學出版社、一九九七)、劉樂賢『馬王堆天文考釈』「第五章日月風雨靈氣占」(二八九頁、中山大學出版社、二〇〇四)。この三つの天地分野説は、みな天官の東井、輿鬼と地の秦と対応している。崔浩のように天干と地支を用いて天の東井と対応させる説は見当たらない。なお小島祐馬「天地分野説と古代中国人の信仰」(『古代中国研究』四四頁、筑摩書房、昭和四十三年) 参照。

(14) 「崔浩曰、始光中、……往年以来、焚惑再守羽林、皆成鈎己、其占秦亡」。又今年、五星並出東方。天応人和、时会並集、不可失也。」(『魏書』崔浩傳)

(15) 江曉原「古今五星聚一覽表」(『回天——武王伐紂与天文歴史年代学』二七二頁、二七六頁、上海人民出版社、二〇〇〇)。

(16) 「魏書」「鉄弗劉虎列伝」は「永光」に作る。「通志」「赫連勃勃」は「承光」に作る。「北史」「僭偽附庸列伝」も「承光」に作る。今、「北史」に依る。

(17) 「昌」字還國、一名折、屈子之第三子也。既僭位、改年承光。世祖聞屈子死、諸子相攻、関中大乱、於是西伐。(「魏書」「崔浩伝」)

(18) 「太宗初……是時、有兔在後宮、駭問門官、無從得入。太宗怪之、命浩推其咎徵。浩以為当有隣國貢饋者、善応也。明年、姚興果獻女。神瑞二年……」。(「魏書」「崔浩伝」)

(19) 「永興三年、(姚)興遣周賀朝貢。五年、興遣使朝貢、並請進女、太宗許之」。(「魏書」「羌姚萇列伝」)

(20) 「永興五年十一月癸酉、姚興遣使朝貢、來請進女、帝許之」。(「魏書」「太宗紀」)

(21) 「夫亮之相(劉)備、英雄奮發之時、君臣相得、魚水為喻、而不能與曹氏爭天下、委棄荊州、退入巴蜀、守窮崎嶇之地、僭號邊夷之間。此策之下者、可以趙佗為偶、而以管肅之亞匹、不亦過乎。且亮既據蜀、弗量勢力、嚴威切法、控勒蜀人、欲以邊夷之衆抗衡上國。出兵隴右、再攻祁山、一攻陳倉、疏遲失會、摧衄而反。後入秦川、更求野戰。魏人知其意、以不戰屈之。知窮勢盡、憤結攻中、發病而死。由是言之、豈合古之善將、見可知難乎」。(「北史」「毛修之列伝」)

(22) 「會有風雨從東南來、沙塵昏冥。宦者趙侃進曰、今風雨從賊後來、我向彼背、天不助人、將士飢渴、願陛下避之、更待後日。崔浩曰、是何言歟、千日制勝、一日之中豈得變易、賊前行不止、後已離絕、宜分軍隱出、掩擊不意、風道在人、豈有常也」。(「魏書」「崔浩伝」を参照。また「通典」「兵七、声言退誘敵破之」卷一五四と同じ)

(23) 「問子房孔明人品。曰、子房全是黃老、皆自黃石一編中來。(中略)孔明學術亦甚雜。(中略)又問、崔浩如何、曰、也是箇博洽底人」。

(24) 「宋子語類」「歷代」二卷(一三五)

「朝廷礼儀、優文策詔、軍国書記、尽関於浩」。(「魏書」「崔浩伝」)

(25) 「崔浩才芸通博、究覽天人、政事籌策、時莫之二、此其所以自比於子房也」。(「魏書」「崔浩伝」)

(26) 「崔浩博聞強識、精于天人之会(太宗語)(「魏書」「崔浩伝」)

(27) 「魏書」「太祖紀」に「……夫人具協、……夫人会合」とある。「魏書」「太宗紀」に「天人之意」とあり、「魏書」「世祖紀」に「天人之会」とある。

(ソングンホウ 筑波大学大学院博士課程)

人文社会科学研究所 哲学・思想専攻